



とやまファン
倶楽部

No.19

2006

CONTENTS

リレーエッセイ	18	西館 好子	— 2P
元気な人	10	森 みちこ	— 3P
とやまの人づくり事業紹介			— 4P
協賛事業の紹介			— 6P
事業報告・事業計画			— 7P

富山の薬売りが子守唄に果した役目

西館 好子さん



プロフィール

西館好子(にしかたよしこ)
日本子守唄協会 代表
東京・浅草生まれ。1982年劇団こまつ座主宰、演劇のプロデュースを手掛ける。
1985年 第20回伊国屋演劇団体賞を受賞。
1995年 スポーツニッポン文化大賞受賞。
30年に及ぶ演劇活動、DV、子供の虐待、女性問題への活動を経て、
2000年 日本子守唄協会設立。
現在は女性史のひとつともいえる子守唄に取り組んでいる。
日本子守唄協会 <http://www.komoriuta.jp>

未来を抱く子の誕生は、未来の日本の行末にかかると、江戸中が子供を大切にしていた。

そんな難しの中、子守唄は時りしげな姿で街を歩いていたのではないだろうか。

この唄の歌詞から考えても、いまひとりの子守唄公の悔めさを感じられない。第一、貧しいために子守に出される娘が里に帰る、土産などを抱いてくるということもありえない。ここでは行儀見聞を兼ねた子守り娘を連想する。

伊勢参りの土産のぞんでん太鼓の首は江戸の街に響いてきたと云う。

江戸の風物詩のように見えたかもしれない。この唄が最初の流行歌というのも驚きの。

当時の江戸は参勤交代興の盛り、各藩は江戸と自国の往復で財政逼迫、戦意などすっかり無くしてしまっていた。いわば単身赴任のゆきな中流武士は赴任中は江戸の空気を遠隔地から感じていたと想われる。

いざ、お国元に帰るとなると持参できる土産など限られている。江戸の香りと想い出話を持った子守唄が江戸土産となり、江戸の町を歩くようになった。

各藩にたどり着いてどう変化したかは、全国各地にあるその類歌によって異なり、それぞれお国の特徴をしっかりと盛り込んで今に歌い継がれている。

さて、この子守唄。実は富山とは切っても切れない深い関わりがある。

富山の薬売りが、実はこの子守唄を全国に伝播させてくれる役を果たしていたといつことを地元富山に住む人もあまりご存知ないようだ。大抵の方は「なせ」と首を傾げてしまう。

でも、富山の薬売りは江戸時代から備前の医師、萬代浄閑なる人が前田正晴公に自家秘伝の反魂丹を献上したのが始まり、公はこの製法を受け、商人に作らせ諸国に行商させたのが売薬業の最初となった。

しかし薬に、科学的根拠や医学の立証があるわけではない。腰痛、頭痛、吐き気といった簡単な症状に効くことを薬売りは自分で宣伝し、売って歩かなければならないセールスマンだった。

そこで、口上や唄や付録といったものが小道具として使われた。紙風船もそのうちのひとつ。唄もまた、その宣伝のため、あるいは人寄せのために使われたのではないだろうか。江戸の子守唄は江戸という都市の宣伝ソング。薬売りは華やかな都市の唄を歩きながら全国に唄そのものまでも伝播する役を担ってしまったのだ。

一日20キロもの道のりを歩く薬売り。脚絆、手巾、地下足袋で身づくろいし、五段行李に薬品を詰め、紺の大風呂敷に包み背に負って歩く。台羽や(後には傘)風呂敷包みを手に、時には危険な獣道までも入り込み全国津々浦々までも網羅したという薬売りの仕事は重労働だ。

行商は年一回、夏と冬は休み、その間薬草を育てたり、薬作りにも精出すという。

江戸は地方の在所にとつて懐れの都市、江戸で唄われた子守唄は、薬売りによって政経済の流通ばかりでなく、文化の流通の中に想われ役目を果たしたのだ。

ねんねんじろりや おじろりや
坊やはよい子だ ねんねしな
坊やのお守は ぞとくへ行いた
あの山越えて 里へ行いた
里の土産になにももった
ぞんでん太鼓に 笙の唄

江戸中期、江戸の町で流行った子守唄だ。唄を手ぬぐいで飾り、ねんねし半纏の子を、持ったぞんでん太鼓を鳴らしながら子守をする者が、唄は格好よく見えたに違いない。

武士に代わって町人文化の花盛り、女、子供が初めて「庶民」として歴史の表舞台に登場してきた江戸の町は、治安が良くなり、気候も温暖で住み良い。人口の比率は圧倒的に女が少なく、男連は大切にしなければすくにも逃げられてしまつとあつてか、むろんそればかりではないと云うのも女が大事にされた。

子供もまた、それ以上に大切に扱われ、母親は遊山に興沢に明け暮れるばかりでなく日本でも最初の「教育ママ」として奮闘していたのだ。

ねんねんじろりや おじろりや
坊やはよい子だ ねんねしな
坊やのお守は ぞとくへ行いた
あの山越えて 里へ行いた
里の土産になにももった
ぞんでん太鼓に 笙の唄

ねんねんじろりや おじろりや
坊やはよい子だ ねんねしな
坊やのお守は ぞとくへ行いた
あの山越えて 里へ行いた
里の土産になにももった
ぞんでん太鼓に 笙の唄

ねんねんじろりや おじろりや
坊やはよい子だ ねんねしな
坊やのお守は ぞとくへ行いた
あの山越えて 里へ行いた
里の土産になにももった
ぞんでん太鼓に 笙の唄

ねんねんじろりや おじろりや
坊やはよい子だ ねんねしな
坊やのお守は ぞとくへ行いた
あの山越えて 里へ行いた
里の土産になにももった
ぞんでん太鼓に 笙の唄

マンガと似顔絵

〜似顔絵を描き始めて思うこと〜

漫画家 森 みちこさん



プロフィール

森 みちこ (Michiko Mori)
漫画家・イラスト・似顔絵アーティスト
1985年 講談社発行「mimi」でギャグ漫画家としてデビュー
1992年 講談社「ウルトラマンの贈り物」単行本発行
芳文社「ハルコだよん」単行本発行
1999年 劇場公開作品「ウルトラマンM78劇場」の制作スタッフとして参加
NHK「おかあさんといっしょ」内のアニメーション「やんちゃもんち」の制作スタッフとして参加
1995年〜2006年 北日本新聞社新春漫画コンクール審査員を務める
2004年 山田美穂劇場第6回「ミツバチの童話と絵本のコンクール」絵本部門優秀絵本賞受賞
2005年 「一期一会展」オリジナルカレンダー展」参加
現在、南城市の広報紙や4コマ漫画雑誌などで、4コマ漫画を掲載。
最近では、絵本の制作にも取り組んでいる。

■似顔絵のはじまり

「イベント会場などで似顔絵を描いていただけじゃないか？」七年前、あるイベントの主催者からそういって声をかけていただいたのです。それまでらくがき程度に友達の間などは描いていたことはあっても、本格的に似顔絵なんて描いたこともなかったし、普段一人で黙々とマンガを描いている私にとって、人前で描くなんてたまたまではないと意識した。何だかんでも、とりあえずやってみよう。という性格の私。「やってみます〜」という返事したのははじまりだった。

それからイベントまでタレントさんの頭写真などを見て似顔絵を描く練習をしました。ところが、人前で絵を描くといつのは、思った以上に大変でした。イベント当日、最初に来てくださった方を描こうとしたら緊張のあまりカタカタ手が震え出したのです。自分でも驚くほど手がブルブル震えて思ったように描けません。「すみません、すみません〜」あやまりながら何とか描き終

えました。そして、ホッとしたのもつかの間、驚くことがおきたのです。似顔絵を描いてほしい〜という人たちの長蛇の列ができたのです。私はひたすら描き続け、気がつけば手の震えも治まっています。

■どんどん広がる似顔絵の輪

「いつか私のイベントデビューは大成功で終わることができたのです。それからというものの、イベントに来てくださった方が、さらに声をかけてくださったり、似顔絵を描いてほしいという方が口々に聞いて、訪ねて来てくださったたり、どんどん似顔絵の輪が広がり、どんどん描く機会が増えていきました。多いときには一ヶ月に百人以上の依頼もあるときもあり、無我夢中で描き続けました。描けば描くほど、似顔絵を描くのが好きで…と感じていました。そんな時、似顔絵を描いた方からこんな事を言ってもらったのです。「この似顔絵、私の性格まで出てる〜初対面なのにどうして私の性格まで分かったの

ですかって」と。

■似顔絵の醍醐味

これはとてもうれしいお言葉でした。実のところ、描いた方の性格までは、はっきりと分からないです。けれども、その方を描いている間はその描いている人の事を私なりにいろいろ考えるのです。ステキな笑いジワだなあ…この人はよく笑う人で前向きな考え方をする人なのだなあ…とか、少しつつ向き加減なのはきつとはずかしがり屋さんなのだろうとか、目に力を感ずるから、この人は仕事もできてるのだから…とか、eero…それが、性格がわかることにつながるのでしょうか？先日あるイベントに見覚えのある家族が来てくれました。そしてお父さんが五年前と二年前の白付の入った似顔絵を持って来てくださったのです。最初の絵は親子三人の姿、次の絵はお子さんが大きくなった三人の姿、そして…今年描いたのは、お父

さん、お母さん、さらに大きくなったお姉ちゃんも…もう二人妹が増えての四人の姿。五年前の似顔絵を見たときは、少しびっくりしましたが（笑）似顔絵描きってほんとにスニーカーと思った出来事でした。

軽い気持ちではじめた似顔絵。少しずつかもしれませんが洞察力がついて、画力もついて、マンガのキャラクター作りにもすごく役に立ったりして、描いた方にとっても大切にしていたり、コミニケーションもとれたり、人と人の輪が広がり、改めて振りがえるので、すごい仕事なのだなあと思えます（笑）。大層生産はできないけれど、心がポツとあたたかくなるような似顔絵を描き続けられたらいいですね。



平成17年12月10日(土)～11日(日) 1泊2日 参加生徒 15名

講師プロフィール



土肥 義治氏
(理化学研究所理事、東京工業大学名誉教授、当倶楽部会員)
1947年 富山県生まれ。
1971年 東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了。
東京工業大学助手、助教授、理化学研究所主任研究員を経て
2001年 東京工業大学大学院総合理工学研究科教授。
2004年 独立行政法人理化学研究所理事、現在に在る。
再生可能な資源である糖や植物油から、生分解性高分子物質をバイオ生産する手法の開発と体系化をめざして研究を進めている。

研究スタッフ 沼田 圭司氏・黒川 賢志氏
東京工業大学大学院総合理工学研究科物質科学創造専攻博士後期課程

県内高校生が科学への関心をさらに深め、将来の進路や人生について考えるきっかけとなることを目指している。現在活躍中である当倶楽部会員の2名の科学

12/10 (土) 講演 (土肥先生) 「地球環境と調和するバイオプラスチックの創成」

バイオプラスチックの研究のきっかけとなった、高岡で過ごした子どもの頃の体験談を交えながら、バイオプラスチック研究の発展の経過と今後の課題について、高校生にもわかりやすく説明していただきました。

●バイオプラスチックといっても「微生物」に分解されて、環境のために「CO₂」を吸収する「プラスチック」として使われるようになったのですが、微生物の遺伝子を組みかえて、体内で生産されるのだというメカニズムがわかってすこく驚きました。

●土の中で分解するプラスチックがあるというのとでは知っていたけれど、それがどのようにしてそういう仕組みになるのか、なぜそうしなければいけないかがよくわからなかった。今は環境にも配慮した船舶が求められているので、このような製法を自分も開発してみたいと思った。



講義 (沼田さん・黒川さん)

黒川さんからは、より高性能のバイオプラスチック合成のための研究、沼田さんからはバイオプラスチックの分解速度を制御するための研究について、現在の取り組みの一端を紹介していただきました。

●バイオプラスチックの性質をよりよくするために、性質の異なる物質を混ぜ合わせ、よい所だけを取り合わせるといって、科学のすばらしさとすごさを改めて実感した。また、バイオプラスチックの分解速度を研究するということにより、この速度を自由に操作できるようなものも作れないかという、科学のおもしろさや可能性を実感した。

●参加する前は、大学院の研究といふのは、いったい何をしているのだろっという感じだったが、たけれど、話が面白くなって、こんなことをするんだというところが知れたので、より大学進学への気持ちが強くなった。



12/11 (日) 発表・討論 「自然科学への夢」

前半は土肥先生の研究を紹介するビデオを観た後、環境問題について語り合い、後半は黒川さん、沼田さんに高校・大学・大学院の違いや大学生生活についてなど、いろいろな質問に答えさせていただきました。

●環境問題について二つ説明してもらい、しっかりと知識を得ることができてよかった。普段大学生から直接話してもらったことがないので、有意義な時間が過ごせました。

●日中は知らない人たちがかりなので、この緊張していましたが、とことんセミナーの時には緊張もほぐれて、環境問題や大学についていろいろと話し合い、充実した時を過ごすことができました。

●昼とは違って、気軽に話を聞いたり、意見を述べたりすることができました。終了後も、先生方と楽しくトークすることができて楽しかったです。



発表・討論 「自然科学への夢」

一人ずつ自分の考えや将来の夢について発表しました。黒川さん、沼田さんからコメントをいただき、お一人にも将来の夢を語っていただきました。

●みな自然科学の夢について真剣に考えているのだとわかった。自分は環境問題についてしか考えていなかったけれど、無限のエネルギーやCO₂問題など、多様なことについて発表していたので、このことを考えていくのではなく、もっと多岐の道を学んでいくことが重要だと感じた。

●参加者の意見を聞くのは、同年代の科学に興味をもつ人はどのような考え方をしているのかという点から、非常に興味深いと感じた。また、大学院生の話も、研究者となることへの意識等、参考になるものが多くてよかった。



高校生とこと

Vol. 2

研究っておもしろい!

～科学と社会をつなぐ仕事～

平成17年12月17日(土)～18日(日) 1泊2日 参加生徒 36名

分けて研究に関する
講義やひざを交えた
交流会を行いました。
義インタビュー大山
研修センターを会場に
行ったセミナーの様子
を紹介いたします。



河崎 善一郎氏

(大阪大学大学院工学研究科教授、
当倶楽部会員)

1949年 大阪府生まれ。
1978年 大阪大学大学院工学研究科通
信工学専攻博士課程修了。名古屋大学
空電研究所助手、スウェーデン・ウプ
サラ大学気象研究所客員講師、大阪大
学工学部講師、助教授を経て

2000年 大阪大学大学院工学研究科教授、理台に至る。
人工衛星を使って宇宙から雲発生を予測するシステムを開発中。



元村 有希子氏

(毎日新聞社 科学環境部記者)

1966年 福岡県生まれ。
1989年 毎日新聞社入社。
西部本社報道部などを経て。
2001年 東京本社科学環境部記者。
現在に至る。
2002年から「理台白書」取材員キップ。

研究スタッフ

酒井 大輔氏・木谷 公久氏

大阪大学工学部電子情報工ネルギー工学科4年

17:00

● 12/17(土) 講演1(河崎先生)
「世界の雷を求めて ― 地上から宇宙から ―」
小学生の時のエピソードや、海外での観測のときの現地の人た
ちの生活の様子なども交えながら、雷物理学の研究に携わるまで
の経緯と、現在の研究について説明していただきました。

● 河崎先生の研究者としてのものの見方、
考え方を聞くことができ、また先生の研究
者になるまでの人生経緯を聞き、自分の進
路を考える上での参考になった。科学は
一つの分野内だけでなく、いろいろな分野
の知識や考え方をもちつことが大切だと
思った。

● 疑問がともおもしろく、大学の教授という
ものはすごいんだと思った。雷についてんけ
ではなく、生い立ちやこれからあるべき科
学の姿についても語っていて、科学という分
野についての関心が増した。

● 今日までには理系が文系系に行くのを決めな
くはない。でも、このおもしろい雷について
まで自分が思っていた理系と文系のイメー
ジが大きく変わり、決めていくにあたって
ても参考になりました。



講演2(元村さん)「科学と社会」

15:20

● 新聞記者という、極めてマルチなところから
科学にアプローチできる元村さんの話は、社
会的な部分と科学的な部分、人と人間の関
係に関するものが多く、特に、アインシュタイン
の怒りの手紙に関する話が興味深く、研究
の成果とそれがもたらした結果までの因果
関係も考えていかなければ、研究者にはなれ
ないなと思った。

● 新聞記者という、極めてマルチなところから
科学にアプローチできる元村さんの話は、社
会的な部分と科学的な部分、人と人間の関
係に関するものが多く、特に、アインシュタイン
の怒りの手紙に関する話が興味深く、研究
の成果とそれがもたらした結果までの因果
関係も考えていかなければ、研究者にはなれ
ないなと思った。



11:00

● 今日までには理系が文系系に行くのを決めな
くはない。でも、このおもしろい雷について
まで自分が思っていた理系と文系のイメー
ジが大きく変わり、決めていくにあたって
ても参考になりました。

● 今日までには理系が文系系に行くのを決めな
くはない。でも、このおもしろい雷について
まで自分が思っていた理系と文系のイメー
ジが大きく変わり、決めていくにあたって
ても参考になりました。



12/18(日)

実験「地球の電気を測ってみよう」

● 酒井さん、木谷さんの指導のもと、同
軸ケーブルと抵抗、針、アース棒で簡単
な装置を製作しました。装置を地面に立
てて、十数mVの電圧をテスターで測定し、
地球の電離層の存在を実感しました。

● コードがなかなか切ることができず苦戦し
た。このような作業は中学校以来でとも
なつかしかった。同じ学校の友人が装置を持
ち帰るようになったので、学校でもせひやっ
てみたい。

● 前日の講演で語っておられた地球全体が
回路になっているという事実を、簡単なもの
を使って装置を自分で作り、自分で実際に
確かめ、考えるという研究の基本を知ら
せられたと思う。

● 河崎先生に疑問をもつことが大事だと
言われて、徐々に自分で考えるという機
会が多くなったような気がするし、ますま
す「考える」ということにおもしろさを感じ
るようになった。



平成17年度 富山県ひとづくり財団協賛事業の紹介

第15回「全国童謡・唱歌サミットinとやま2005」

童謡・唱歌をテーマに活動している自治体や諸団体等が参加し、全国的な連携のもと、童謡・唱歌の継承、普及活動の推進を目指したサミットが、平成17年10月8日(土)・9日(日)の2日間、富山市芸術文化ホール(オーバード・ホール)他で約2,000人の聴衆を集め、開催されました。

このサミットでは、初日は「童謡・唱歌ファンタジーコンサート」として、富山県内外の少年少女合唱団やプロの歌手が多彩な童謡・唱歌を披露したほか、2日目は分科会や全体会で県内外の合唱団のメンバーらによって、童謡・唱歌を若い世代に歌い継ぐための活動のあり方などが話し合われました。



ジャパンロボットフェスティバルin TOYAMA

全国の最先端ロボットや富山の技術を一堂に紹介する体験型イベント「ジャパンロボットフェスティバル in TOYAMA」が11月3日(祝・木)～6日(日)の4日間、富山市のテクノホールで開催されました。

来場者は34,500人となり、多くの皆様は50体の最先端ロボットや高い技術力を誇る富山県内企業・教育機関の取組みを見て、触れて、実感されました。

また、併催イベントである富山市体育文化センターで開催された「子ども体験・ものづくりフェア」も8,000人の親子連れで賑わい、ロボット工作教室や宇宙服体験などを通して、ものづくりや科学の面白さ、楽しさなどが体験できました。



楽しむ科学教室

基礎科学の分野に関心を持つ高校生対象の「楽しむ科学教室」が平成18年1月22日(日)、富山県総合福祉会館で開催されました。ノーベル物理学賞受賞者で本教室主催の平成基礎科学財団理事長の小柴 昌俊氏のあいさつの後、甲南大学教授・京都大学名誉教授の佐藤 文隆氏が「雲はなぜ落ちてこないのか?～星の形成から暗黒物質まで～」と題して、講演されました。

約200名の参加者の皆さんは、身近な疑問についての科学的な解説にじっくり聞き入り、講演会が終了してからも佐藤先生に直接、質問をしていました。



事業報告

「とやまふるさと使節」募集案内を当倶楽部会員の皆様だけでなく、皆様から紹介を受けた方々にもお送りし、あわせて当倶楽部の会員募集を行いました。皆様のご協力によりまして、約50名新たに当倶楽部会員が増えました。この場をお借りしまして、報告させていただきます。

今後とも、会員の皆様からの新規会員のご紹介や、意見ご要望などがございましたら、事務局もしくは連絡所まで情報をお寄せいただきますよう、よろしくお願いいたします。

1 世話人会及び会員交流会の開催

平成17年7月21日(木)にホテルフロラシオン青山(東京都港区青山)で約150名の会員の皆さんのご参加のもと、開催されました。

2 会報等の発行

- (1) 会報18号(平成17年10月)
- (2) 会報19号(平成18年3月)

(3) 会員名簿(平成17年7月)

3 情報の普及

富山県の最新の情報・話題を掲載した情報誌等を送付いたしました。

4 会員メッセージの紹介

当財団のホームページ上で、皆様からいただきましたメッセージを掲載させていただきました。個人情報保護の観点からお名前はイニシャルとさせていただきます。



[<http://www.t-hito.or.jp/>]

事業計画

1 世話人の改選

2 世話人会及び会員交流会の開催

3 会報及び会員名簿の発行

4 情報の普及

5 会員の交流

新年度につきましては、会員の皆様のメッセージを5月頃、交流会の開催案内にあわせて募集を開始する予定にしております。

多くの皆様のメッセージをお待ちしております。

お知らせ

「水と緑といのち輝く富山

一六期」二十四年間の軌跡」刊行

このたび、当財団の中沖 豊理事長の知事在任時を振り返った、書籍「水と緑といのち輝く富山一六期」二十四年間の軌跡」が刊行されました。

富山県の発展と県民のしあわせのためには、何よりも富山県が持つ大きな「県民の力」をさらに高め、県民みんなが知恵を出し、力を合わせて世界に向けて発信していかなければならないと指摘し、「特に、若い人には、夢と情熱をもって、大活躍していただくことを心から期待しています。」と記されています。



書籍は三章構成
B5版で169ページ
【非売品】

TOYAMA FAN CLUB



問合先

■事務局

財団法人 富山県ひとづくり財団

〒930-0018 富山県富山市千歳町1-5-1 富山県教育記念館2階

TEL 076-444-2000 / FAX 076-444-2001

E-mail:toyama@t-hito.or.jp <http://www.t-hito.or.jp>

■連絡所

富山県東京事務所

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-6-3 都道府県会館13階

TEL 03-5212-9030 / FAX 03-5212-9029

富山県大阪事務所

〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町1-9-15 近畿富山会館3階

TEL 06-6445-2811 / FAX 06-6445-2611

富山県名古屋事務所

〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄4-1-1 中日ビル4階

TEL 052-261-4237 / FAX 052-263-7308